

## 保井 志之 D.C.

私にとつてのカイロプラクティックを端的に振り返ると、「ズレを治す」という考

え方から、「誤作動記憶」の治療へと進化しました。慢性

症状などのいわゆる病氣、あるいは不健康が「記憶」と密

接に関係しているということの確信を得て以来、それに関

する探求心が広がりました。症状に関連する「記憶」とは、無意識レベルの誤作動記憶という視点でみると、行動心理

学、認知神経科学、コーチング技法などと密接に関係し、勉強の幅もかなり広くなりました。

脳幹部に関連する「反射系」の記憶は、ハード面、すなわ

## （最終回）「誤作動記憶」の治療

ち肉体レベルの施術で効果が引き出されます。しかしながら、「大脳辺縁系」に関係する情動などの潜在意識に関連する誤作動は、心身相関レベルに関連する潜在感情や信念、価値観などを検査して施術を行う必要があります。

外科的経験や知識、技量

どの外科医の経験や知識、技量

外科的経験や知識、技量

どの外科医の経験や知識、技量

に委ねられますが、患者の自然治療力を引き出す治療は、単に経験や技量だけで治療効果が引き出せるわけではあり

ません。経験や技量も必要ですが、それ以上に必要なのは患者のコミットメント、すな

わち、心の奥から治したいという気持ちです。それは「意識レベル」ではなく、「無意識レベル」と一致したコミッ

トメントです。どんなに優れた治療法でも患者の無意識よりも先には進めないということを長い臨床経験で学びました。そのコミッ

トメントには、患者と施術者との信頼関係、さらには患者自身が自分の治療力を信じていることが大前提として必要

です。もしも、患者のコミッ

トメントと信頼関係があるという前提条件が揃えば、ほとんどの患者は改善されます。特に自分自身の治療力に対する信頼関係にブレーキをかける患者が多く、それらは「意味記憶」や「エピソード記憶」に深く関係しています。

「無意識」の脳のクセとなる「誤作動記憶」が不健康を創り出すので、健全な記憶を上書きすることで健康を取り戻すことができます。現在、私はその考え方に確信を得ています。特にパーマー大学での留学経験は私の人生にとつてはかけがえのない財産になつてい

ることは間違いないと

ません。これからも多くの人の健康に役立つことができるように「誤作動記憶の治療」を社会に広め、さらに進化した治療法を極めていきたいと願っています。

（終わり）



保井 志之DC